

反核医師ジャーナル

第72号 発行：核戦争に反対する医師の会・愛知

2015年9月15日
vol.34 No.2

(名古屋市昭和区妙見町19-2)
愛知県保険医会館気付
TEL052-832-1345

第26回 反核医師のつどい

被爆・戦後70年

in 愛知

医療者は戦争も核も許さない

◆日時 2015年 **10月31日(土)・11月1日(日)**

◆会場 AP名古屋. 名駅(名古屋市中村区名駅4丁目10-25 名駅IMAビル8階)

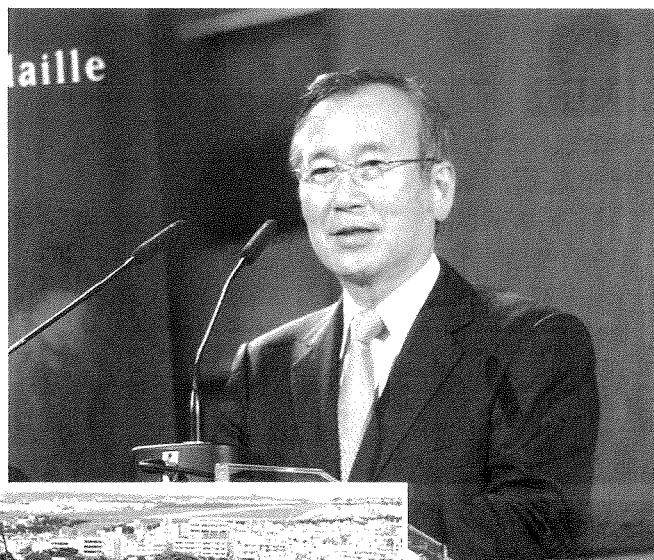
1日目 10月31日(土) 14時～

●記念講演

核なき世界は実現できる
～被爆70年と日本国憲法

秋葉 忠利氏

(ヒロシマ・ピース・オフィス代表、前広島市長)



●特別講演

太平洋核実験

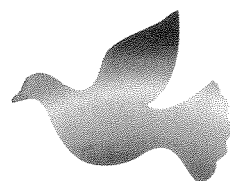
一知られざる被ばくの実態

伊東 英朗氏

(南海放送ディレクター)



2日目は3つの分科会を行います。



参加申し込み・問い合わせは「核戦争に反対する医師の会・愛知」
(TEL 052-832-1346 愛知県保険医協会内) までご連絡ください。

反核医師のつどいin愛知

多くの参加で

「つどい」を成功させよう

募金にも
ご協力ください

「核戦争に反対する医師の会（反核医師の会）」と、「核戦争に反対する医師の会・愛知・保険医協会・愛知民医連でつくる実行委員会」の主催で、「第二十六回核戦争に反対し、核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどいin愛知（反核医師のつどい）」が、十月三十一日（土）と十一月一日（日）に名古屋市内で開催されます。

「ひとたび核兵器が使われたら、私たち医療に携わる者でも被爆者を救うために出来ることはほとんどない。しかし、核兵器が使われる前になら「予防」ができる。」

反核医師の会はこうした思いから発足し、毎年「反核医師のつどい」を開催してきました。

今年是被爆・戦後七十年であり、四月にはNPT（核拡散防止条約）再検討会議がニューヨークで開催された節目の年でもあります。

ます。広島・長崎の原爆で未だ苦しんでいる被爆者や原発事故の避難者があり、放射能の被害は決して過去の問題ではありません。また、今国会では安全保障関連法案の審議が行われており、予断を許さない状況です。

メインスローガンの「被爆・戦後七十年 医療者は戦争も核も許さない」には、いのちを守る医師・歯科医師として核兵器も原発もなくし、憲法九条を守り生かし、日本を戦争する国にさせないという決意が込められています。

今年を核兵器廃絶への転換点の年とし、戦争する国づくりを許さないため、多くの会員の参加を呼びかけます。

※愛知県保険医協会会員・研修医会員・学生会員の方は、愛知県保険医協会から参加費の補助が受けられます。

第26回 核戦争に反対し、核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどい

- 日 時 2015年10月31日（土）・11月1日（日）
- 場 所 A P名古屋・名駅（名古屋市中村区名駅4丁目10-25 名駅IMAビル8階 電話 052-561-1109）
- 参加費 医師・歯科医師：5,000円／医療関係者：2,000円／医・歯学生：1,000円

1日目 10月31日（土）14時から

- 全体会 14：00～14：30
- 記念講演 14：30～16：30
核なき世界は実現できる～被爆70年と日本国憲法 秋葉忠利氏（ヒロシマ・ピース・オフィス代表、前広島市長）
- 特別講演 16：45～18：00
太平洋核実験一知られざる被ばくの実態 伊東英朗氏（南海放送ディレクター）
- 懇親会 18：30～20：30 ホテルサンルートプラザ名古屋
（名古屋市中村区名駅2-35-24 電話 052-571-2221）
※懇親会参加費 医師・歯科医師、医療関係者：7,000円／医・歯学生：5,000円

2日目 11月1日（日）9時30分～13時

- 第1分科会 核廃絶への展望
 - ・2015年NPT再検討会議の結果と核兵器廃絶の展望
富田宏治氏（関西学院大学法学部教授、原水爆禁止世界大会起草委員長）
 - ・核兵器の人的影響に関する国際会議報告
眞鍋 穰氏（阪南医療生協診療所所長、全日本民医連被ばく問題委員）
- 第2分科会 日本における放射線被害—過去・現在・未来—
 - ・福島県における放射線障害の実際 松本 純氏（生協いいの診療所）
 - ・「放射線リスクに関する基礎的情報」批判—出版の目的と3つの視点
間間 元氏（生協きたはま診療所所長、反核医師の会 原発プロジェクト委員）
- 第3分科会 憲法9条から考える～集団的自衛権
川口 創氏（弁護士、イラク派兵差止訴訟弁護団事務局長、国民安保法制懇事務局長）

反核医師のつどい
募金にご協力を

同封の振込用紙でぜひ
募金にご協力ください。

私の病気を

原爆症と認めてください

ノーモア・ヒバクシャ訴訟

医師の証人尋問行われる

七月十五日(水)、十六日(木)、十七日(金)の三日間、ノーモア・ヒバクシャ訴訟愛知の証人尋問が行われた。

愛知県では四人の被爆者が二〇一一年に提訴し、今回原告三人と浅海嘉夫医師(核戦争に反対する医師の会・愛知世話人、北病院)、澤田昭二氏(被爆者、



意見書作成に協力した医師(左の3人)と原告

国は被爆の影響を原爆がピカッと光った時の初期放射線によるものしか考慮していない。しかし浅海氏は原告被爆者の被爆状況や被爆後下痢や脱毛などの急性症状が出ていることなどから、原告らの被爆は内部被爆を含め相当な被曝量であると考えられること、

医師の連名意見書を提出

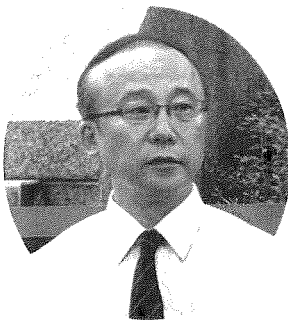
名古屋大学名誉教授)の証人尋問が行われた。

戦後70年の今、 何としても決着を 証人に立って 浅海 嘉夫

またその後の病歴や診療歴から疾病が放射線の影響によるものと考えに妥当性があると述べた。今後十二月には結審し、年度内に判決の予定。

原爆被爆者の疾患を、被曝によるものと国が認めないため、二〇〇〇年に入り原爆症認定集団訴訟が始まりました。ほとんどの裁判で国が敗訴となり、現在第二次集団訴訟(ノーモア・ヒバクシャ訴訟)が進められています。

名古屋でも四人の被爆者が認定却下を不服とし国にその取り消しを求める裁判を起こしています。弁護士たちが準備を進め



証人尋問に立った浅海医師

るなか、どうしても医学的な判断が必要となり、反核医師の会に依頼、一昨年から私を含め四人の協力医師(中川、土井、早川各医師)がその手伝いをする事となりました。医学論文の検討とともに、実際の診療の場での扱い方を弁護士たちは求めていたようでした。裁判が進むにつれ、いよいよ医師、物理学者の証言が必要となり、私と澤田昭二先生(物理学者、名古屋名誉教授)が法廷に立つこととなりました。

七月十六日湿度の高い名古屋地方裁判所。原告の心筋梗塞、慢性甲状腺炎、乳癌、肺癌、白内障について、その原爆放射線起因性、要医療性の有無が争われています。原告側、被告側双方の代理人(弁護士)の尋問に証言すること二百分。医学部卒試口頭試問が延々と続いているような気分でした。

癌および非癌疾患が、時を経るにつけ有意に被爆者に発症しやすいこと、生存被爆者減少のため細かい疾病区分では統計処理の限界も生じること、医療現場などでの低線量被曝でも疾患がふえるという新しい知見が得

られていること、などを論証しました。また、国連の科学委員会や国際放射線防護委員会で、統計的に証明できなくても低線量での疾患の発症を否定すべきでないとして述べられていることを示しました。また、薬を処方するだけが医療ではなく、患者さんの経過をフォローすることでも再発、合併症を防ぐことも必要な医療であることを訴え、原告いづれにも医療の必要があることを主張しました。

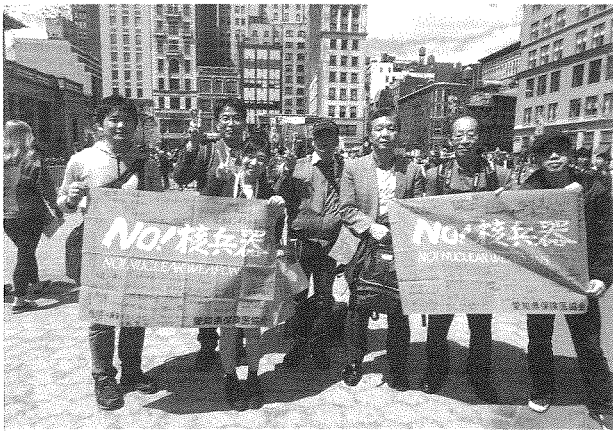
慣れない場ですから、証人尋問に臨み、やや緊張はあったものの、原告弁護士、協力医師との綿密な打ち合わせのおかげで、無事証言を終えることができました。国側弁護士の勉強不足、決定打のない主張、裁判長から注意を受けるような準備不足、等々にも助けられた感がありました。

年末に結審、年度内に判決となるノーモア・ヒバクシャ訴訟。福島原発事故での低線量被曝問題に影響を及ぼすと考えて、国はどうしても低線量での疾患発症を否定したいようですが、戦後七十年の節目にしたいと思います。決着をつけたい裁判です。

NPT(核不拡散条約)再検討会議・ニューヨーク行動参加者からの報告

四月二十七日から国連で開かれたNPT(核不拡散条約)再検討会議に向けたニューヨーク国際行動に核戦争に反対する医師の会・愛知および愛知県保険医協会から医師三人と事務局を代表派遣した。

NPT再検討会議は最終日の五月二十二日、残念ながら前々回に続いて最終文書は合意されなかった。これは前回会議の最終合意文書にある「中東の非核化の話し合いを二〇一六年三月



代表派遣された4人を含む2班のメンバー

までに開始する」という文言に、アメリカ・イギリス・カナダが強固に反対したことによるものであり、到底許されるものではない。

前回会議から五年間、核兵器の全面禁止・廃絶を求める声はさらに大きく発展した。核兵器の「人道的影響」についての共同声明には百六十カ国が賛同し、「核廃絶」が世界の主流であることが再検討会議では示された。

代表派遣にあたっては、核戦争に反対する医師の会・愛知および保険医協会から、国連に提出する二千六百六十二筆の署名と、代表派遣募金五十三万三千五百円の協力が寄せられた。今後、代表派遣された四人を先頭に、核兵器禁止条約の実現や核兵器の非人道性を訴え、核廃絶の運動を今まで以上に推進することで、ご協力いただいた会員各位へのお礼とした。

署名行動と国際行動デー「ニューヨーク行動」

世話人 坂本 龍雄

レポートの見出しに「行動」が三つ並んでいる。本来なら別の表現を工夫すべきであるが、愛知県代表団(第二班)としてニューヨークで過ごした数日間、この見出し通り「行動」満載の毎日であった。

タイムズスクエアでの署名行動

ニューヨーク滞在二日目、NPT再検討会議開催の前日であるが、タイムズスクエアでの「核兵器全面禁止を求めるアピール署名」の行動からスタートした。タイムズスクエアはニューヨークを代表する繁華街であり、日中でも企業広告の巨大ディスプレイやネオンサインにあふれ、勤め人だけでなく観光客の往来も多かった。

署名行動は名古屋の街頭であっても怯んでしまうものだが、同

じ第二班の若者二人(南生協病院の研修医である福元さんと看護師の山下さん)に負けじと、私も思いきって通行人に署名用紙を突きつけてみた。ペアを組んだ山下さんの呼びかけ「Excuse me(微笑)」の魅力に負うところが大きいと思われるが、三十分余で十数筆の署名を集めることができた。呼びかけに応じてくれた通行人の多くは、署名用紙の要請文にしっかりと目を通し、そのうえで署名するか「NO」と言って立ち去った。

言葉の壁がなければ、引き続き平和問題について話し合えそうな誠実さと真剣味が伝わってきた。「No to Nuclear Weapons」などのプラカードが少々目立つとはいえ、交差点の角々で通行人に声をかけているのは「Toy Story」の登場人物に仮装した一団、市内観光バスのチケットを売りつけようと必死な黒人青年たち、そして我々だけである。

繁華街の小さな集団の平和の呼びかけに足を止めて訴えを聞いてくれた勇気あるニューヨークカーや観光客に心から感謝しつつ、板津先生からいただいた折り鶴をお渡しした。もちろん、

期待以上の「Thanks」「Gracias」「Merci」と満面の笑みが返ってきた。

「日本での署名活動よりもやりやすいと感じた」との感想を他でも聞いたが、民主主義のマナー(自分の頭で考える、少数意見を尊重するなど)が日本よりも普及しているのだと思う。

余談であるが、ワールド・トレード・センター跡地に造設された、水が流れ落ちる巨大プールのモニュメントの縁に刻まれた犠牲者の名前に、数十の折り鶴がひとつひとつ丁寧に差し込まれていた。「No more Hiroshima」

「No more Nagasaki」の祈りとともに折り鶴を想起する日本人は多い。ニューヨークでも折り鶴は鎮魂と平和祈念のシンボルになっていた。

その後、第二班のメンバーは地下鉄に乗り、国際行動デーのパレードの出発点となるユニオンスクエアに向かった。快晴だった。小川班員の目になったカフエでジャズの生演奏を聴きながら、大皿に載せられたクラッシックバーガーとフライドポテトをアメリカカンコーヒーでお腹まで流し込んだ。

草の根からの平和行動が集結

広場に設けられた特設会場ではスピーチやパフォーマンスが繰り広げられていた。被爆者の中村雄子さんの訴えがあり、また、セミパラチンスク核実験場の放射線被害者の訴えも聞くことができた。「We shall overcome」の合唱もあった。会場は着物姿のご婦人方やカラフルなマントで身を包んだ青年など、視覚的にも賑やかだった。

多くの米国人にとって核兵器は軍事計画の中に組み込まれた通常兵器なのかもしれない。しかし、大義なきイラク戦争による甚大な人的・財政的な損失、戦争終結後も拡大するイラクや中東地域の混乱、自国で深刻化する経済的不平等など、生存権や社会正義が踏みにじられていくなか、米国では草の根からの平和行動が各地で湧き上がり力をつけてきた。そしてその力が核兵器廃絶・世界平和を目指す日本の強大な平和勢力と手を取りあい、こうしてユニオンスクエアに集まっているのである！

ドやチラシ等、実に多彩で、親子連れの姿に彼らの平和活動の地道さを感じ取ることができた。

一万人の大パレード

一時間ほどして、日本原水協の「No more Hiroshima! No more Nagasaki! Abolish Nuclear Weapons!」の横断幕を先頭に、国連本部近くのハマーシールド広場までの大パレードがスタートした。「代表団ニュース」によれば参加者は一万人で、沖縄代表団のエイサーや三線、岡山代表団の「うじゃ踊り」(岡山の夏祭り名物)などが次々と披露されたそうである。

愛知代表団は五千二百ピースのLEGOからなる原爆ドームの模型を神輿代わりに行進した。第二班のメンバーは運び手としてよく奮闘した。この原爆ドームの第一印象はnot so beatだった。通行人の評判はすこぶる良好で、交差点に止まることに多くのカメラが向けられた。一つひとつのピースにニューヨーク行動に向けたメッセージが書き込まれていて、この作業には保育園児も参加したと聞き、第一印象が大幅に修正された。

「We shall overcome」を確信

ようやくハマーシールド広場に到着した。「核兵器の全面禁止を求めるアピール署名六百三十三万六千二百五人」の横断幕が披露され、日本原水協代表団の高草木博共同代表が国連のアンゲラ・ケイン軍縮担当上級代表に署名目録を手渡した。松井一実広島市長もあいさつに立ち、平和首長会議として集めた百十万人分の署名目録を同じくケイ

NPT再検討会議二〇一五の結果は残念、実質は前進

世話人 板津 慶幸

皆さんの支援をいただきまして、一週間にわたるNYでの核兵器禁止を訴える国際行動に参加してきました。東海岸は初めてであり遠かったですが無事に参加し、トラブルなく帰ってきました。そして会議の最終日を迎えた五月二十二日のニュースが気がかりでしたが、最終文書に全会一致が得られずに採択

されないという残念な結果になった

ン氏に手渡した。NPT再検討会議のタウス・フェルキ議長は、核軍縮は政府だけであることではなく、市民一人ひとりの行動があつてこそ実現できると訴えた。ケイン氏は署名への感謝とともに、会議に参加する各政府代表がこの署名に込められたメッセージを心に刻むことを期待すると述べた。おそらく前途多難だと思うが、「We shall overcome」を確信し、明日の行動に向け散会した。

てしまいました。オーストリアのクルツ外相が、核兵器の非人道性と不使用を訴える共同声明を発表し、百五十九カ国・地域が賛同し(加盟国百九十一)、法的に禁止を求める文書に百七カ国が賛同するという状況にあつても今回の事態になつてしまったのです。

核保有国は追い込まれている

世界的に対立関係が激化したことを背景として、核保有国が核の脅しである、いわゆる抑止力にしがみついている実態を露呈したもので、強く非難されるべきです。しかし、今回の再検討会議での議論の実質は核兵器

の非人道性を非難し廃絶の法的枠組みを求めるもので、最終文書の草案の段階では核兵器禁止条約が初めて書き込まれたことも大きな前進でした。最終文書採択がされなかったのは、アメリカが中東非核問題で拒否したのですが、これは保有国の言い訳、言い逃れであり、ここまで追い込まれていることを示したものです。夏の原水禁世界大会へむけて運動を強めていきましょう。

Peace & Planet

NYでは到着の翌日四月二十六日(日)から署名活動に出かけ、片言の英語での訴えに数は少なかったですが署名してくれました。初めての経験でしたのでとても嬉しかったですし、プレゼントした「オリガミ」に友好的な笑顔が返ってきた時には平和的友情を感じました。実に貴重な体験でした。午後からのPeace & Planetの集いが日本から一千五十八人を含め七千五百人で行われ、引き続き大パレードを国連近くまでつづけ、ここで六百三十三万筆を超える署名の国連への提出式が行われました。アンゲラ・ケイン国連軍縮

担当上級代表は「市民の草の根運動が力になる」と高く評価しました。長年にわたるヒバクシャの語り部活動と禁止署名活動が大きな影響力を発揮していることを確信させるものでした。

医療と福祉関係者のつどい

再検討会議が始まった四月二十七日には国際シンポジウムが開催され、二十八日には「医療と福祉関係者のつどい」が行われました。ヘルスケア産業の労働組合(SEIU二一九支部)

の講堂で開催されて二百六十名が参加しました。医師のトニー・ルイス氏と政治部副責任者のベテル・マンジュラ氏が「アメリカ医療とオバマケア」と題しての講演がありました。「よいニュースを報告できます」として、五年前に成立した「患者保護と利用できる医療法(オバマ・ケア法)」について述べられました。激しい攻撃にあったが、今までの無保険者五千万人のうち五年間で三千万人が保険に入れた、「初めて薬が飲めた」ということになったとのことでした。数百万人の命が助けられたのであり、健康への権利が初めて確

立されたのだとの評価でした。今後をもっと健康を要求する運動を続けていきたいと述べられていました。

Q & Aでは、保険料について今まで一千ドルから四千ドルだったが月額百ドルで、患者負担については、メディケイドは負担がないが、その他は保険料と患者負担が反比例することでした(保険料が安いと免責が大き

い)。堤未果さんの本は知らないで今後研究したいと思います。TPPへのSEIUとしての声明は出していない、病院の受診増について正確な数字は出ていない、ある病院では三百人から四百人が無保険だったのが十人となったなども。核廃絶と非人道性についての質問には、「人間の尊厳を守るのは基本である。答えるための事実を知らない。人道について議論したい」との発言がありました。

沈みゆく大国アメリカ

堤未果氏の著書「沈みゆく大国アメリカ」では、疾病があっても加入できること、負担上限ができたことなどの反面、州の半数で月々の保険料が上がって

しまい、「高額な欠陥商品」で保険会社は笑いがとまらないとのこと。又、薬をどれだけ値上げしても税金で買ってくれるので製薬会社も笑いが止まらないと記しています。

日本の皆保険とは全く違う

つどいのまとめ発言で中川武夫保団連理事が「オバマケアはあくまでも民間保険に入るもので、日本の国民皆保険とは全く違うという点、TPPはとても危険なものである点を確認しておくことが大切である」とピシッと締めて、つどいを終りました。

夏の原水禁世界大会へ

今回の運動は引き続き、世界大会へつづきますが、大きな注目が注がれると思います。又、現在国会で審議中の戦争法案を許さない闘いも同時に取り組んでいきましょう。

大きな成果を上げることが
求めてニューヨークへ

事務局長 中川 武夫

私は、四月二十七日の夕方開

催された、日本原水協代表団会議・国際シンポジウムについて報告する。会議は、セントラルパーク沿いのNew York Society for Ethical Cultureで十六時から開かれた。国連見学から急いで駆け付けたが、開催時間ぎりぎりに会場へ到着することができた。メインテーマは「ともに核兵器のない世界へ―新たな地平を開こう」で、会場には日本全

(日本原水協代表理事)をコーディネーターに、ホルヘ・ロモナコ氏(メキシコ軍縮大使)、セルジオ・ドウアルテ氏(元軍縮問題担当国連上級代表)、ジョセフ・ガーソン氏(アメリカフレンズ奉仕委員会)、ジェニー・クレグ氏(イギリス核軍縮運動)の四人がパネリストを務めた。パネリストからは、下記のような発言があった。

安井正和氏(日本原水協事務局長)が「代表団の任務の第一に掲げた署名提出を、前日に全員の力で成功させた。被爆七十年を核兵器廃絶の転換点とするために、私たちの運動の役割は極めて大きい」と開会あいさつ。また第九回NPT再検討会議を傍聴した者から、会議冒頭に潘基文国連事務総長の「フェル

セルジオ・ドウアルテ氏・政府、国際組織、市民社会、個人が決意し共同して目標実現のために努力すれば、核兵器のない世界の展望を開くことができる。『共同して』がカギ。わずかな国が人類全体を破壊させることに市民として声を挙げて抵抗しよう。核兵器廃絶は、核兵器を使わせない唯一の現実的保証である。

キ会議議長が会議成功のための様々な署名を受け取り、これらの署名は、我々に市民社会が力強い希望と期待を持っていることを教えている」というメッセージが読み上げられたと報告があったと紹介した。

シンポジウムは、高草木博氏を歩みたい。

ジョセフ・ガーンソン氏：日本から六百万以上の署名をスーツケースに詰め、一千人以上が来て、数千人のニューヨークデモに参加したこと心打たれた。安倍ストンプ、傲慢なオバマ政権もストンプさせよう。人間の運動を構築しよう。

ジェニー・クレグ氏：総選挙の最中のイギリスでは、一千五百億ドルもの巨額のトライデンント核潜水艦システム更新計画が争点に浮上している。「トライデンントではなくNHSを」キャンペーンが展開され、イギリス人のアイデンティティが試されている。選挙結果によっては、イギリスが最初の核兵器所有をやめる国になるかもしれない。

質疑の後、ジェニー・クレグ氏からは「Never give up. 英国では人々が生活に関わりがある」と理解したから政治に関心を持っている。行動、デモンストレーションも大切だ。行動し続けることが核兵器を廃絶する力となります」と、セルジオ・ドゥアルテ氏からは「みなさんから元気をもらった。核兵器に反対する政治家に投票することが必要だ。これまでの運動を継続し

てください」とのメッセージがあった。

このシンポジウムを通して、改めて「核兵器廃絶を求める署名」の力を確認できたこと、また、世界各地で様々な運動が取り組まれていることを確認できたことが何よりの成果であった。

NPTの会議は五月二十二日まで続けられたが、残念ながら最終文書は前回に続いて採択されなかった。報道では、広島・長崎への訪問を呼びかける文言に中国がクレームをつけたと伝えたが、最終的には「中東の非核化の話し合いを二〇一六年三月までに開始する」という文言に、米、英、カナダが反対し、全会一致にならなかった。しかし、この「中東非核化」は前回のNPT会議の最終文章ですのに合意されていた内容であり、今回の拒否は決して許されるものではない。

この結果について、「核廃絶の動きが後退した」との評価も見られるが、私にはそのようには思えない。前回のNPT再検討会議から五年、核廃絶に向けた運動は、「核兵器の人道上の影響」をキーワードに、大きく

前進し、「共同声明」には日本を含め、百六十カ国が署名している。

極めて残念な結果ではあるが、「核廃絶」への流れに反対する国はやがて追いつめられることになる」と確信する。

「これからが
本当のスタート」
核廃絶の想いが
世界を変える力になる
南生協病院初期研修医
福元 進太郎

四月二十五日から五月一日にかけてNPT再検討会議・ニューヨーク行動に参加させて頂きました。

はじめに、私たちの活動を応援して頂いた皆さんに深くお礼を申し上げます。各地域から沢山の署名やカンパが届き、病院でも「NPT頑張つてね!」と声をかけてもらう機会が多く、嬉しかったです。

私自身「自分でも何か行動を起こさねば」と思い、三月に院内のホールで音楽イベントを開催しました。計百人以上の来

場で、入場料をカンパに回すことができました。

そして四月二十五日、南医療生協で集められた計二千二十二筆の署名をスーツケースに入れ、ニューヨークへと旅立ちました。

二十六日にはニューヨーク市内を練り歩くパレードが開催され、七千人以上の参加者と共に核兵器廃絶を訴えました。愛知県代表団はレゴブロックで作った原爆ドームの模型を四人がかりで持って行進しましたが、多くの反響がありました。そしてパレードの目的地である国連本部前の広場に、全世界から集められた署名(計六百三十三万六千二百五筆)を積み上げ、タウス・ヘルキー会議議長とアンガラ・ケイン国連上級代表に提出しました。

翌二十七日に第九回NPT再検討会議が開会しました。開会総会で読み上げられた潘基文事務総長のメッセージには「市民社会グループは軍縮を促進する上で重要な役割を果たしている。会議議長と国連は、市民社会グループから、この会議の成功と核兵器の廃絶をよびかける要請

署名を受理した。これは人々の希望と期待とを力強く想起させるものだ。われわれは、何年ものあいだ軍縮を擁護し、かくも多くのことを行ってきた多くの人々と団体とに感謝する。この事業への彼らの努力に、私は全面的な支持を誓いたい(一部抜粋)」という内容が含まれました。私たちの集めた署名(私たちの声・想い)が各国の政府代表に届いた瞬間でした。

滞在中は毎日、タイムズスクエアなどの繁華街で署名活動を行いました。英語で話しかけて署名をお願いするのは勇気が要りましたが、予想以上に多くの人がサインしてくれ、大きな励みになりました。核兵器廃絶を想う気持ちに国境はありません。

今回のニューヨーク行動に参加して、核兵器廃絶を願う世界中の多くの人々の想いを感じ、その想いがつながり・集まって世界を変えていく大きな力になることを学びました。「これからが本当のスタート」という意気込みで、今後も病院内外でアピールしていければと思います。

被爆70年 核廃絶の緊急性を訴える

原水爆禁止二〇一五世界大会

今年も「核兵器のない平和で公正な世界のために」をテーマに原水爆禁止二〇一五年世界大会国際会議が八月二日～四日、長崎大会が八月七日～九日に、それぞれ開催された。反核医師の会からは、国際会議に坂本龍雄世話人、長崎大会には早川純午会員を代表派遣した。

七日の長崎大会開会総会には、二十一カ国・百四十七人の海外代表を含め五千五百人が参加した。第一部の全体会で、田上富久長崎市長は「核廃絶の問題は

広島・長崎だけでなく、世界中の問題として考えていくべきだ」と述べ、谷口稜嘩氏が「命ある限り被爆の実相を訴え続けます」と表明した。第二部の文化の夕

べでは、政府代表として発言したイシカワ駐日ベネズエラ大使夫人でソプラノ歌手の石川コロンえりか氏が「被爆マリヤに捧げる賛歌」などを披露、会場は大きな拍手で包まれた。

八日は、「憲法をいかに、非核平和の日本を」など十二のテーマ別集会や動く分科会が開催された。九日の長崎大会閉



9日の長崎大会閉会総会の様子

会総会には、約六千人が参加。

被爆七十年スペシャル企画「被爆地長崎から世界へ」では、被爆者が登壇、発言した。各国代表がスピーチを行い、その後各地の代表が横断幕などを手に登壇し、取組みを報告し決意を語った。安井正和氏（原水爆禁止日本協議会事務局長）は、「被爆者が生きている間に被爆者の生き方、たたかい、願いを、国際政治の中で共同して広めていく

核兵器廃絶の

転機は可能だ

会員 早川 純午

NPT再検討会議が最終文書を探取できず。安倍内閣の暴走。何を見ても暗くなる世情に、どう現状を捉えて、何に希望を持つかを考えようと八月七日に長崎市民会館体育館到着した。

長崎のつどい一部では富田起草委員長から国際会議宣言の説明がされた。宣言には四つの方向として①民主主義とその流れが主流に、②法の支配・核兵器廃絶の「法的措置」を求める「人道の誓約」に百十三カ国が賛同、

事が大事。安倍政権を大きく包囲しよう」と決意を述べた。最後に「We shall overcome」を全体で合唱し、盛大に幕を閉じた。

こうした中、核廃絶を世界的運動に発展させるために、核廃絶に向けて核保有国の「核抑止力論」を打ち破り、人道的なアプローチから核を禁止するような役割が被爆国日本に強く求められている。

③抑止力が時代遅れの理論…ステップ・バイ・ステップは核廃絶を正面の議論にすぎないもの、④紛争の平和的・外交的解決について話され、大変すっきりした。この宣言と沢田先生の国際会議開会の挨拶も必読文献と思われた。その後の発言も心を強くさせた。

長崎市長は核の傘の下で何があったのか発言をする。平和のまち長崎をつくる。われわれは核兵器のない世界を諦めることなく求める。

インドネシア・核兵器がもたらす非人道的結果を忘れ得ない。この惨劇を防ぐ保証は核兵器廃絶だ。人道性イニシアチブに百

五十九国が賛同した成果に確信を。生物化学兵器の廃絶法は実現している。最大的大量破壊兵器核兵器の廃絶も可能。

被爆者谷口さん…うつ伏せで寝ていた一年半、主治医とは顔を見合わせていなかった。戦争法案は絶対に許せない。

インドCNB…インドはかつて核兵器を廃絶と言っていたが、核を作り抑止力に頼る。しかし、パキスタン紛争で間違いがわかった。

元氣な平和行進の挨拶…「安倍が止まるまで我々は歩く」も良かった。

文化行事が素晴らしく、感動した。被爆者歌う会ひまわり、ベネズエラ大使夫人のアベマリア、「平和の旅へ」合唱団、梅原さんの力強い「We shall overcome」など自分の青春時代に声を張り上げて歌っていた時以上に、歌が持つ力を感じた。

翌八月八日、動く分科会・佐世保基地視察に参加。

百二十年間軍港の町。佐世保の空襲は軍港ではなく民家を襲った。敗戦時三十万市民は、軍港から平和の港へと平和宣言を行うが、朝鮮戦争により軍港に戻っ

てしまう。

地位協定により、狭い佐世保の陸地は米軍の基地と住宅が占拠し、湾の周囲は補給基地、弾薬庫、軍艦の修理整備場所になっている。佐世保は海兵隊を世界の海岸の殆どに強襲をかけ上陸する艦船の基地であり、すでに自衛隊でも日本版海兵隊がこの佐世保で作られてきている。

湾には漁船のかげも、漁船がつながれた港もみえない。静かな湾内の巨大で最新鋭の軍艦があり、日米の区別は旗だけで、すでに一体化した戦争法案の先を進んでいる現実をみた。

最終日八月九日午後、浦上天主堂入口手前の原爆で破壊された石像の前に、「石像がこんなに焼け、頭が飛ばされている。人だったらどうなると思うか」と、平和ガイドの高校生が同年の若者に説明しているのに心を熱くした。

放射線影響研究所にも行ってみた。研究所は隣の整形外科より小さく、真面目な病院祭りのように、職員が全員で説明していた。特別展示で低線量被ばくが取り上げられていた。被曝の影響では、「被ばく」とのみあり。

これは外部被ばくを指しているのですか？と聞くとうだう。内部被ばくについては問題にしない口ぶりだった。

「過去の教訓を生かすことができるのがひと」「広島長崎

海外からの参加者の 声に耳を傾ける

世話人 坂本 龍雄

昨年に引き続き、原水爆禁止二〇一五年世界大会・国際会議(広島)に参加する機会を得た。

「核兵器禁止条約」締結に向けた交渉を即時に開始するよう、六百三十万を超える「核兵器全面禁止を求めるアピール署名」を第九回NPT再検討会議に突きつけた。しかし、米英加が中東非核・大量破壊兵器地帯会議の招請をめぐる文言に反対したため、当初の目的を達成できなかった。しかし、国際会議では、この悔しさをバネに、被爆七十年の節目の年を核兵器のない世界への転機にしようとの熱のこもった討議が展開された。ここでは海外代表の発言やメッセージをピックアップしてその要旨を紹介する。

福島を忘れつつある、知ること学ぶことが、時間と空間を埋めることだ。

さあ学習し、国際宣言と署名をもって、また歩みを続けようとした。

介する。

【フィッシャー大統領(オーストリア)】NPT再検討会議では、オーストリアのクルツ外相が発表した核兵器の非人道性と不使用を訴える共同声明に百五十九カ国が賛同し、核兵器の人道的影響に深い懸念を表明した(核保有国はいずれも不賛同)。この大量破壊兵器の脅威を廃絶するためあらゆる努力を払う。

【マウラー赤十字国際委員会総裁(スイス)】正式に核兵器の使用を禁止し、法的拘束力のある国際条約により核兵器を廃絶に導くよう、引き続き国際社会の機運を高めることに力を尽くす。

【グエン平和委員会副会長(ベトナム)】全国から百五十万筆の「アピール署名」を集めた。【グレンバルト平和協会・戦争抵抗者同盟国際書記(ドイツ)】すべての核保有国は自分たちの核兵器を近代化している。どの国も

核軍縮に歩み出そうとしていない。【ウェアUNFOLD ZERO(スイス)】NPT再検討会議の最終文書起草案には、国連によるオーブンエンド作業グループを設置する提案が含まれていた。核軍縮を推進するため、国連総会・国際司法裁判所・国連オーブンエンド作業グループなどに焦点をあてて活動していく。【イ・テホ参与連帯事務局長(韓国)】日本と同様、韓国も米国の核の傘に依存している。世界平和の島と命名された済州島で、核搭載可能な航空母艦とイージス艦が同時に寄港できる海軍基地が建設されている。平和の島が韓・米・日軍事同盟の前哨基地に転落しないよう闘ってゆく。【マディソンロングクラブ島民代表(マーシャル諸島)】一九五四年にビキニ環礁で行われた水爆実験の影響はいまだに深刻で、ロングクラブ島はゴーストタウンになっている。核兵器を保有する九カ国に対し、国際法上の核軍縮義務に違反していることを確認するための訴訟を、国際司法裁判所におこした。【ホフシュナイダーテナン女性協会(北マリアナ諸島)】米国は北マリアナ諸島に

大規模な軍事施設を建設しようとしている。その影響は甚大で、環境と調和しながら生活するチャモロ民族の崩壊につながりかねない。【アーチャー国際平和ビュロー事務局長(スイス)】軍事費削減国際キャンペーンをさらに強化するため大きな国際会議を準備している。通常兵器による威嚇は核兵器の開発と使用への誘惑を強めるものだ。【フランアポリシヨ2000(フランス)】

広島デーから四日間、断食行動を呼びかけ、核兵器への強い反対の意思を示した。【グリーンクライストチャーチ市民(ニュージーランド)】長崎デーでは、長崎市長から寄贈された世界平和の鐘のもとで追悼式を行い、四十年にわたり灯籠流しを続けている。【核兵器全面禁止】を掲げ、被爆者を先頭に取り組まれてきた核兵器の非人道性に関する認識を世界に向けて拡大し、世界の平和勢力の隆盛を牽引してきた。それだけに、初志貫徹と弛みない努力が世界中から期待されている。

33周年記念講演会

核戦争に反対する医師の会・愛知

被爆者の思いを伝える

「核戦争に反対する医師の会・愛知」は六月十三日(土)の午後、保険医協会伏見会議室で三十三周年記念講演会を行った。「被爆七十年の今 伝えたい被爆者の思い」NPT再検討会議に参加して」と題し、水野秋恵^{とさへ}氏が講演を行った。参加者は五十五人。以下講演概要を紹介する。

NPT国際共同行動
参加のきっかけ

四月から五月にかけてニューヨークで行われたNPT再検討会議国際共同行動に初めて参加した。元々今回のNPT再検討会議国際共同行動には愛知県から被爆者は一人も参加しないことになっていた。しかし、二〇一〇年のNPT再検討会議の時には全国から五十人近くの被爆者が参加していた。今回も被爆



NPT再検討会議に参加した板津慶幸氏、坂本龍雄氏、中川武夫氏(写真右から)

原爆の恐ろしさ

自身の被爆体験はNPT再検討会議国際共同行動でも、英語

に訳して配布して伝えてきた。だから、今回は六十年間一度も被爆体験を話さなかった一宮市の男性について話したい。

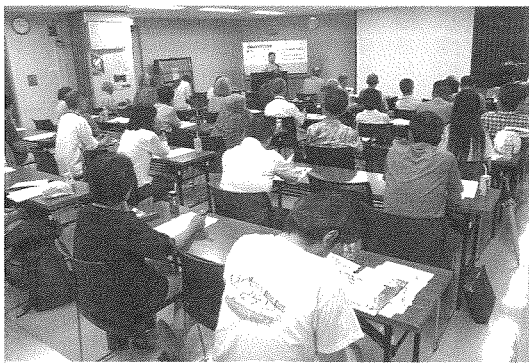
彼は、長崎の原爆で親と弟妹三人を亡くした。あの日、母と四人は、警報が解除され、防空壕を出た。しかし、母が防空壕にお弁当を忘れ、彼に取りに戻るよう言った。防空壕の入り口まで戻ったその時、原爆が落ち、防空壕の奥まで吹き飛ばされた。すぐに外に出て母や弟妹を探し、なんとか会うことができた。しかし、家族の体調が悪くなった。ところが次の日、妹が亡くなった。母から妹を焼いてきてほしいと頼まれた。戸板に妹をのせ、破壊された家の柱を井桁に組んで火をつけると、死んでいるはずの妹の体が動いた。生きていた妹を焼いてしまったのではないかと驚いた。そして二人の弟と妹も亡くなり、焼くと同じように動いた。生きていた弟妹を焼いてしまったのではないかと六十年間悩み、苦しみ続けた。当時九歳の彼にそんな思いをさせる原爆は絶対許されない。

アメリカの9歳の少年、
安倍首相に手紙を送る

ニューヨークでの原爆パネル

展示を九歳の少年とその母親が見学に来た。二年前少年はワシントンDCにあるホロコースト(ユダヤ人大量虐殺)の記念博物館の資料を見て、第二次世界大戦の悲しい歴史を知った。なぜこんな悲しいことが起きたのかを知るため勉強していくうちに、広島・長崎の原爆のことを知った。母親は日本人で、広島と長崎の原爆資料館にも行って勉強した。広島や長崎のことをもっとたくさんの人に知ってもらうために本を作りたいと思っているようだ。

少年は国連に被爆者が来ると聞いて会場に足を運び、被爆者の谷口稜^{すずも}氏に取材を申し込んだ。三十分なら良いとのことだったので話を聞いたが、三時間にも及ぶ取材になった。原爆はどうしても許せないと思い、このことを学校でクラスの友人に話したが、広島・長崎の被爆者のことを誰も知らなかった。そこでみんなに知ってもらうために発表した。校長先生に途中で止められ



てしまった。

母から日本はまた戦争をしようにしていると聞き、安倍首相に手紙を出した。「日本は二度と戦争はしてはいけない、日本こそ世界に向かって平和を訴える国なのだ」と。

自分たちも黙っていてはいけない。もつと訴えて、行動をしないかなければならない。

次いで坂本龍雄、板津慶幸、

中川武夫各氏は国際共同行動の参加報告を行った。NPT再検討会議の内容については「新聞各紙は会議の結果は、決裂」と報道しているが、大多数の国は核兵器の非人道性を認め、廃絶に賛同している。世界の流れは

確実に変化していると言える」と報告した。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
講演会終了後に行った二〇一

多くの犠牲の上に「約束」された宝物

憲法9条を守る運動の先頭にたつて

(愛労連二〇一五年八月号転載)

被爆七十年 被爆者の思いは……

戦後七十年。広島や長崎で被爆した人たちの平均年齢は八十歳を超え、忌まわしい戦争体験や核兵器の恐ろしさを語れる「語り部」も年々減ってきています。愛知県原水爆被災者の会(愛友会)事務局長で自身も被爆者である水野秋恵さんに話を聞きました。

五歳の夏、爆心地から一・二km離れた広島島の祖母の家で被爆しました。投下された瞬間、たくさんのフラッシュを合わせたような光とともに家は崩れ、母や私、二人の弟など瓦礫の下敷

五年度総会には、十五人が参加した。十月の愛知での反核医師のつどいの成功と、会員拡大に力を入れていくことを確認した。

きになりました。兵隊に助けら

れた弟は頭や顔から血を流し、私も瓦礫から引きずりだされましたが、右腕に大けがをしましたが、母は全身ボロボロの布をまとったような姿で髪は天に向かって逆立っていました。避難場所の川では死んだ人がたくさん流され、真っ赤に焼けたトタンが飛んでくるなど、とても安全とよべる場所ではなく、その後、神社まで避難しました。しかし、医者も薬もなく、食べ物も腐って糸を引くオニギリしかないとめ、農家をしている伯母の家に引き上げました。

父も母も原爆の被害に

防空壕に寝泊まりし、私たちが捜していた父は残留放射能の

影響だと思いますが、一九五六年に結核であつて亡くなりしました。母は一九六七年に亡くなっていますが、二人とも原爆に殺されたと思っています。長い間、「これが私の運命。日本は戦争していたのだから仕方がない」と思っていました。学習する中で「原爆投下」の意味を知りました。当時の日本は食べ物もなく、餓死者もおり、陸軍・海軍はほぼ壊滅状態でした。なのになぜヒロシマ・ナガサキに原爆がおとされたのか。その後も続いたアメリカとソ連の冷戦の中で、アメリカが政治的・軍事的に有利になるため、そして開発されたばかりの原爆の影響について、調査研究のためにヒロシマ・ナガサキの人々が選ばれたのです。

爆心地から熱線の直射を受けた人は皮膚が焼きつくされ、体内の組織や臓器まで障害を受け、ほとんどの人が即死です。その後、救護活動で入市した人たちも残留放射線で発病しています。核兵器は人間として死ぬことも、人間として生きることすら許さない狂気の兵器です。人類とは決して共存できません。

二〇〇三年以来、たたかわれてきた原爆症認定を求める集団訴訟は、国の認定制度が被爆の実態に見合わないことを明らかにし、三度の認定基準改定を勝ち取りました。しかし、厚生省の姿勢により、行政認定との隔たりはうまっています。「ノーモア・ヒバクシャ愛知訴訟」は七月十五日に証人尋問がおこなわれるなど裁判も大詰めです。この機会に被爆の実相を知っていただきたいです。

世界の8割が「核廃絶」の思い

いま、世界では八割が「非人道的な核兵器は廃絶しかない」と一致しています。五月におこなわれたNPT(核不拡散条約)再検討会議の場でも、世界中が日本に注目し、核廃絶のため日本が中心にならないといけないと改めて感じました。これから生きていく若い人たちには、近現代史を学んでほしいと思います。若いみなさんが主役なんです。歴史を知り、「(政権の動きや情勢が)あの時と同じだ」「ここで騙されてはいけない」としっかり感じてもらいたいと思います。

被爆者相談会

健康のために心がけること

健康講座に協力

六月十七日(水)の午後、愛知県原水爆被災者の会(愛友会)の依頼で、豊橋市職員会館で開催された「被爆者相談会」に健康講座の講師派遣で協力した。参加者は十五人。

この相談会は毎年愛友会が愛知県からの委託で開催しており、最初に被爆者に対する各種手当てについて愛知県の担当者が説明した。

健康講座は、土井敏彦氏(反



健康について話す土井敏彦氏(正面)

核医師の会・愛知事務局次長、南医療生協かなめ病院内科医)が、「高齢者の健康習慣」と題して話した。適正な睡眠時間をとる、喫煙をしない、適度な運動を定期的に続ける、バランスの良い食事をとるなど、健康増進のために心がけるべき七つの生活習慣を紹介した。また近年は、胃がんや肺がん、大腸がんが増えており、「がん検診を積極的に受けて早く見つけて早く治療することが大切だ」とした。さらに、何でも遠慮せずに話すことができる医師を見つけて上手に受診すると良いと話した。

その他、六月二十日(土)には名古屋市緑生涯学習センターで棚橋千里氏(反核医師の会・愛知世話人、南生協病院)が、六月二十八日(日)には、名古屋千種生涯学習センターで浅海嘉夫氏(反核医師の会・愛知世話人、北医療生協北病院)が健康講座の講師を担当した。



金山駅コンコースで原爆パネル展

被爆の実相を広げ、核のない世界を

被爆者支援ネット

会場では「自分も広島に住んでいたんです」と話しかけてくる人や、証言ビデオに見入る人もいた。

で約五千人がパネルを熱心に見入っていた。

パネル展示の他、被爆者の証言ビデオの上映、ピースメッセージ入りのレゴブロックで作った原爆ドームの展示や折り鶴コーナーなども設置し、核兵器をなくそうという思いを表現する取り組みも行った。

感想ノートには原爆の悲惨さや核兵器をなくすことの大切さに共感する思いが寄せられた。

核戦争に反対する医師の会・愛知も参加する被爆者支援ネットと愛知県原水爆被災者の会は、八月十五(土)、十六日(日)の二日間、金山総合駅コンコースイベント広場で「原爆と人間」パネル展を開催した。

今年は被爆七十年の節目の年。多くの市民に被爆の実相、被爆者の体験を知ってもらい、核兵器廃絶実現への転換点の年にし

ようと昨年引き続き企画した。

多くの人が行き交う中、急ぐ足を止めて見つめる人や、パネルの内容について子どもに説明する母親、手をつなぎながら寄り添って見るカップルなどの姿が見られた。年配の方から親子連れまで各年代層の市民、両日

